

ミニコミ紙「D」における手話歌論争

加藤 晃 生

1：はじめに

「D」は、1991年11月から1996年2月にかけて、合計で15号¹⁾が発行された、ろう者向けの不定期刊の新聞である。No.1からNo.7までは木村晴美が個人で発行し²⁾、No.8からNo.15までは、木村晴美を含むろう者のグループ「Dプロ（現在はD PROと表記される）」の「D編集室」が発行した。

さて、この「D」は、15号というさほど多いとは言えない号数の中で、何度も手話歌、手話コーラス（以降、本論文ではこれらを総称して「手話歌」と表記）に関する意見やニュースを掲載している。この事実は、この時期のろう者社会において、手話歌が一定の問題を孕むものと捉えられていたことを示唆するものである。そこで本論文では「D」誌上の手話歌言説を整理し、当時の日本のろう者社会において手話歌の何がどう問題とされていたのかを考察する。

2：「D」とは

前述のように、「D」とは後に日本のろう者社会のオピニオンリーダーの一人となる木村晴美が、その言説活動の最初期に個人で発行していた、いわゆるミニコミ誌である。総ページ数は毎回8ページで、頒布価格は1部100円であった。その内容は

(1)他の新聞や雑誌に掲載された、ろう者に関係

する記事の転載

(2)木村自身の考えを述べた署名記事

(3)読者からの投函

(4)無署名・匿名記事（「H男」「D子」と名乗る人物が登場する対談風のものを含む）

(5)「D編集室」と署名されたオピニオン記事

の5種類に分類可能である。(1)にはアメリカ合衆国で英語によって書かれた記事の翻訳を含む。最も多く翻訳掲載されたのは、当時アメリカ合衆国で先鋭的なろう者運動を展開していたMJビエンヴニュ（MJ Bienvenu）がメリーランド州リヴァーデイルに創設した「バイカルチュラル・センター（The Bicultural Center）」発行のニューズレター、「TBCニュース」紙の記事であるが、他にもかつてアメリカ合衆国で聴覚障害者向けに発行されていた月刊紙「サイレント・ニューズ（Silent News）」の記事が翻訳掲載されている。

木村は「D」の目的を次のように位置づけている。

ミニコミ紙である『D』は、編集者の主張を世に問いかけるために存在するのであって、一定の中立公正さ、報道の客観性を求められるマスコミとは、その性格や存在意義が根本的に違う（No.5:4）

つまり、「D」紙上の議論や「D」そのものの論調が当時の日本のろう者社会の平均的な考え方を表している訳ではなく、むしろ当時の木村の思

想的立場から、日本のろう者を啓蒙していこうとする意図で編集されていると捉えるべきである。

さて、これらの性格と特徴を持つ「D」は、当時のろう者社会においてどの程度の存在感を持っていたのだろうか。それを具体的、実証的に示すことは不可能であるが、現在公開されている「D PRO」のウェブサイトにおける、「D PRO 活動の歩み」を見ると、最初の記述である1991年7月の第11回世界ろう者会議開催を説明する文章に続き、

1991年11月、D編集室がミニコミ紙『D』を創刊し、ろう文化と日本手話について日本のろう者社会に問題を提起しました。しかし『D』は「急進的だ」「過激過ぎる」との批判をかなり受けました。

との記述が掲載されており³⁾、また「D」が休刊となる以前の1995年2月には、木村とその編集上のパートナーであったとされる市田泰弘が雑誌『現代思想』に「ろう文化宣言：言語的少数者としてのろう者」と題された論文を発表し、日本の聴覚障害者たちの諸社会に大反響を巻き起こした⁴⁾ことをも考慮すると、この時期の木村による言説活動が一定の影響を持ち得ていたと考えることは不自然では無い。即ち、「D」は1990年代後半から2000年代にかけての日本のろう者の社会運動の原点の一つとも言える存在なのである⁵⁾。

3：方法

前述のように、「D」は木村の「主張を世に問いかける」為の媒体であり、2節の分類の(2)、(4)、(5)など直接的に木村あるいは「D」編集室の主張が文章化された記事も少なくない。また同じく(1)のような転載記事、(3)のような読者投降も、その取捨選択には木村自身の意図がある程度反映されていると見るべきである。一方で読者投降や転載記事のテキストそのものは、その書き手

の意見を反映していると言える。

「D」に掲載された記事はこうした二重構造を持っている為、その分析においても二つの手順が必要であると筆者は考える。すなわち「その記事を掲載した木村の意図は何か」の分析と、「『D』に掲載された記事の書き手の主張は何か」の分析である。

具体的な方法であるが、木村の意図の分析において我々が知り得るのは「木村が読者に提示したかったもの」であって、木村が読者に提示したくなかったものが何かを我々が知ることは出来ない。よって我々はまず「D」に掲載された記事の傾向を検討し、どういった主張を木村は読者に提示しようとしていたのかを考えることとする。

次に我々は、読者投降も含む個々のテキストそのものの内容を吟味し、この時期の日本のろう者社会及びその周辺において、手話歌にどのような眼差しが向けられていたのかを考察する。なお、本論文が考察するのは1990年代前半の日本における手話歌言説であるから、翻訳記事はこの分析の対象とはしない。

4：「D」が読者に提示した手話歌関連の記事の傾向

「D」紙上に掲載された諸記事のうち、いわゆる手話歌に関係するものは24件である(表1)。

表1に示した24件の記事の中で、手話歌に対し否定的な見解を示している記事が10件、賛否両論が混在した記事が6件、賛否を示していない記事が6件、手話歌に対し肯定的な記事は2件である。すなわち24件中およそ67%の記事で手話歌に対する批判が行われており、逆に手話歌に対する肯定的な言説の割合は33%と、否定的な言説のおよそ半分に留まっている。この数字から少なくとも我々は、「木村は手話歌を批判する様々な言説を、ある程度まとまった量で提示しようとした」と言いうる。

さて、それらの中でも最も重要な言説と考えら

表1：「D」紙上に掲載された手話歌関連記事の一覧

掲載号・ページ	タイトル	書き手（カッコ内は聴覚に関する文化的属性）	手話歌に対する賛否
No.3 (1992.3.1)・5	私の手話コーラス考	木村晴美（ろう者）	否定
No.4 (1992.5.1)・3	手話こそろう者の言語、文化（転載記事）	池口美穂（聴者）	肯定
No.4 (1992.5.1)・3	Dゼミナール・レポートより	森亜美（不明）	否定
No.4 (1992.5.1)・4	Dフォーラム（投稿ページ）	野呂和子（聴者）	否定
No.4 (1992.5.1)・4	Dフォーラム（投稿ページ）	武田弥生（不明）	否定
No.6 (1993.2.5)・8	プラス『けれども』	中川芳子（不明）	混在
No.7 (1993.10.1)・1	「ストップ・ザ・ミュージック！」	D編集室	なし
No.7 (1993.10.1)・2-4	STOP THE MUSIC!（翻訳記事）	トム・ウィラード（不明）	なし
No.7 (1993.10.1)・5	反響—サイレント・ニュース編集者への手紙（翻訳記事）「変革への挑戦、勇気ある行動」	マーガレット・ヘイベルマン（不明）	なし
No.7 (1993.10.1)・5	反響—サイレント・ニュース編集者への手紙（翻訳記事）「通訳者よ、抑圧に敏感であれ」	ロン・カフェイ（CODA）	否定
No.7 (1993.10.1)・5	反響—サイレント・ニュース編集者への手紙（翻訳記事）「これは手話歌についての議論ではない」	ダイアン・ヘイゼル（不明）	なし
No.7 (1993.10.1)・6	TBCニュースへの投稿から（翻訳記事）「MJへの手紙」	セイヤー・ダウ（ろう者）	否定
No.7 (1993.10.1)・7	私もその場にいたかった—D子、「ストップ・ザ・ミュージック」を語る	D編集室	否定
No.8 (1993.11.20)・6-7	海外情報《“ストップ・ザ・ミュージック”続報》〔TBCニュース54号から〕デフコミュニティの音楽とは？（翻訳記事）	ホリー・ロス（ろう者）	混在
No.9 (1994.3.15)・4	手話を歌によってもてあそんでいる……『ささやかな私のわがまま』（転載記事）	不明（ろう者）	否定
No.9 (1994.3.15)・4-5	タイムリーな問題提起に拍手—なぜ、ろう者の手話コーラスサークルは解散したか（転載記事）	不明（ろう者）	混在
No.9 (1994.3.15)・5	もっと冷静に行動したほうが理解しあえる	近野秀美（CODA）	なし
No.9 (1994.3.15)・5	言ってもらわないと、聴者にはわからない	林恭子（聴者）	混在
No.10 (1994.5.1)・5	海外情報《“ストップ・ザ・ミュージック”続報》〔サイレントニュース1993年2月号から〕MJからの応答：抑圧と闘う人々を非難するなかれ（翻訳記事）	MJ・ピエンヴェニュー（ろう者）	否定
No.10 (1994.5.1)・6	「手話歌」たのしい？（転載記事）	まつむらたつし（聴者）	混在
No.10 (1994.5.1)・7	「手話歌楽しい？」を読んで（転載記事）	竹本勝代（ろう者）	否定
No.10 (1994.5.1)・7	聴者が出る幕ではない！（転載記事）	岡田篤樹（ろう者）	混在
No.10 (1994.5.1)・7	音楽の好きなろう者もいます（転載記事）	肥田才子（ろう者）	肯定

れるのは、その扱いの大きさから考えても MJ による「ストップ・ザ・ミュージック」事件とそれに続く論争であろう。「ストップ・ザ・ミュージック」事件とは、1992年11月にフィラデルフィアで開催された手話通訳者の集会において、MJ ビエヴニュが聴者による手話歌の上演を途中で止めさせたという出来事のことである。この事件は直後に「サイレント・ニュース」紙で大々的に取り上げられ、更にその論調に反論する形で「TBCニュース」紙に MJ 自身のものを始めとする幾つかの文章が掲載されることとなった。

実際、「D」紙上におけるこの事件の扱いは別格と言って良い程に大きい。というのも、表1を見れば解るように、事件からおよそ1年後に発行された No.7 は、8 ページ中7 ページがこの事件に関する報道と感想で占められているし、No.9 と No.10 にも続報が掲載されているのである。また記事の由来という点から見ると、手話歌に関する翻訳記事の全てはこの事件に関するものなのだ。

それでは、何故、木村はこの事件をこれ程に大きく取り上げたのだろうか。背景にあったのは、おそらくは木村自身が抱えていた手話歌への不満である。No.7 の7 ページに掲載された「D 子/H 男対談：私もその場にいたかった—D 子、”ストップ・ザ・ミュージック”を語る。」という記事では、「D 子」なる人物が、「H 男」なる人物と短い対談をしているが、その冒頭で「D 子」は次のように述べている。

H 男 このニュースを耳にした時、どう思った？

D 子 胸がすくような気持ちっていうのかな。私たちがやれずにいたことを MJ はやってのけた。拍手拍手って感じ。それと、私もその場にいたかった。歴史的な瞬間、見たかったな～。

H 男 日本にも手話コーラスとか手話シャンソンとか。あるけど。

D 子 日本のろう者は初めから割り切ってる

ところがあるのね。だから、誰も表立って反対を唱えたりはしない。

「D 子」「H 男」と名乗る人物が実際に誰であったのかは、実際に編集に関わった者以外には知りようも無い。ここでは「D」「H」というアルファベットがそれぞれ Deaf (ろう者)、Hearing (聴者) という英単語の頭文字であることと、この時期の「D」の編集者がろう者である木村と聴者である市田であったことを指摘するにとどめる。ともかく木村と市田が、このような対談記事を「D 編集室」という名義で作成したことだけは確かな事実である。

さて、ここでの「D 子」の発言を裏付けるかのように、No.7 に掲載された、この事件に関する反応を紹介する翻訳記事は、その全てが MJ の行動への共感を表明するものであった。そこから判断しても、「D 子」が木村自身であるかどうかは別として、「D」編集人としての木村が、アメリカのろう者社会における MJ の行動への共感に注目していたことは疑いようが無い。

また木村は『現代思想』臨時増刊号「ろう文化」誌上で行われた MJ との対談では、この事件について次のような感想を述べてもいる。

木村 MJ さんは以前、STOP THE MUSIC (その音楽はやめろ) 事件を起こされましたね。そのニュースを聞いた時、日本じゃとても同じようなまねはできないなと思いました。日本にも手話コーラスはありますが、やめろと言える雰囲気じゃないですね。ろう者たちも仕方がないから形だけは拍手を送るのですが……。 (後略) (MJ・木村 2000: 359)

これらの文章から我々は、当時の木村は「日本において手話歌がろう者の心情を無視した形で実践されている」と考えていたのであり、そうした状況に対し不満を感じていたのであろうと推測しうる。しかしながら MJ との対談で木村が指摘し

たように、当時の日本において、手話歌への不満を手話歌が実践されている場で表明することは、当時の日本のろう者社会で最も先鋭的な論客の一人であった木村にとってさえ難しいものであった。そんな時に飛び込んできたのが、MJによる「ストップ・ザ・ミュージック」事件のニュースである。木村はこの事件とそれに続く論争を日本のろう者社会に紹介することで、日本における手話歌の実践状況への問題提起を行ったのであろうし、そしておそらくはそれによって、日本のろう者社会とそれを取り巻く聴者社会が形成していると木村が考えていたであろう「抑圧」の構造に対する間接的な異議申し立てをも試みたのではないだろうか。そのように考えなければ、木村が「D」紙上において「手話歌を批判する様々な言説を、ある程度まとまった量で提示しようとした」理由を説明することは難しい。何故ならば、仮にこの時点で木村が手話歌に肯定的な言説ばかりを集めて提示したとしても、日本における手話歌実践に対する有効な介入とはなり得なかったはずだからである。

というのも、1990年代前半という時期は、西沢佑が主宰する聴者中心の「日本手話ダンス友の会」が急激に規模を拡大していった時期であり、1980年頃から始まった日本における聴者中心の世俗の手話歌実践が、その規模において一つの頂点を迎えつつある時期であったのだ。日本における世俗の手話歌実践はこの後、主にろう者によって牽引され、それ以前の西沢らによるテキストに代表される旧来の手話歌への批判から数々の革新的なテキストが産み出されてゆくこととなるが、そうした動きの出発点ともなった二つのグループ、すなわち南留花（現在は南瑠霞に改名）の「きいろぐみ」と阪本誠の「Deaf Unit」でさえ、まだこの時点では活動を開始するかしないかという状況である（加藤 2006）。となると、当時の木村が「手話コーラス」「手話歌」という言葉を使った時に念頭にあったのは、聴者の振付師による従来の手話歌実践と見て間違い無い。

仮に木村が手話歌を批判する言説を大々的に紹介したのが「きいろぐみ」「Deaf Unit」あるいは「日本ろう者手話ダンスグループのぞみ」「ひよこっち」「こころおと」など、ろう者を中心とした手話歌の実践主体が精力的な活動を展開していた2000年代初頭だったのであれば、木村の言説活動は従来の聴者の手話歌実践を対象にしたものなのか、南や阪本らの実践をも射程に入れているのかが問題となるであろう。だが、木村が「D」紙上で手話歌批判言説を次々に紹介したのは、「手話歌」「手話コーラス」と言えば現代フラをもとにした西沢らの「手話ダンス」あるいは朝倉まみの「手話シャンソン」⁶⁾であった1990年代前半であり、この時点で西沢らの活動には強力な追い風が吹いていたのだ。つまり、この時期に手話歌肯定言説を大々的に紹介しても、西沢らの活動には微々たる影響、しかも好影響を与えるだけなのである。批判的言説だけが当時の状況に一石を投じることが出来た。

5：「D」に掲載された諸記事に見る手話歌への眼差し

本節では、「D」に掲載された日本人による手話歌言説の細部を検討する。

表2に、それらの記事の記述のうち、特徴的な部分の抜粋を示す。これらの記述から読み取れる主張は、幾つかの類型に分類することが可能である。手話歌に対して否定的な言説は、以下の五つの類型に分けられると筆者は考える。

- A：ろう者は本当は手話歌が嫌いなのに、聴者はそれに気付いていない。
- B：手話歌はろう者の文化ではない。
- C：聴者はろう者に手話歌を押しつけている。
- D：手話歌のテキストはろう者にはわからないものだ。
- E：手話歌をする人の中には、自分たちの手話歌がろう者にどう思われているかに無頓着な人がいる。

表2：「D」紙上に掲載された、日本人によって書かれたと思われる手話歌言説

記事とそこに含まれる類型	手話歌に言及した部分の抜粋。〈〉内は類型分類の根拠とした記述。
私の手話コーラス考（3号、木村晴美、ろう） 類型 ABCF	（引用者注、以下カッコはすべて同じ：手話コーラスに参加している）「手話サークルの人達が見事に寸分違わず手を動かすので、それは美しく見えた。〈F〉」「ろう者たちのほとんどは、好きで舞台上に立っているように見えなかった。〈C〉」「手話コーラスはろう者が自らすすんでやるようなものではない。〈A〉」「どう考えても、手話コーラスは「ろう文化の産物」ではないのである。〈B〉」「「あなた方健聴者は、いやがるろう者を舞台上に引っ張り込むことだけはしてはならない！」〈C〉」
手話こそろう者の言語、文化（4号、池口美穂、聴） 類型 FG	「単に、歌いながら、歌詞の単語に合わせて手話単語を表すのではなく、手話言語という聾者の文化の特徴をつかんで、芸術的に手話で、歌を表すことで、音楽と聾者を結べると思うのです。〈G〉」「三人が一組になり、メロディーに合わせて、歌詞の風景を空に描いていく……。とても美しく、感動的なコンサートでした。〈F〉」
Dゼミナール・レポートより（4号、森亜美、ろう） 類型 A	「そんな彼女（ろう学校でコンサートをした歌手）でさえも、聾学校でスクール・コンサートをを行う前は純粋に、手話を使ってみようと思っていたのである。それが日本語対応手話であろうと、手話コーラスであろうと、とにかく手話を取り入れようとしたのである。〈A〉」7)
Dフォーラム（4号、野呂和子、聴） 類型 CD	「（自分たちの手話コーラスは）他の人たちの手話コーラスよりもずっと楽しんでもらえるだろうと思っていた。ところが、それは私たち聞こえる者の自己満足・自己陶醉でしかないことが、しばらくしてわかってきた。〈C〉」「手話を見て歌を楽しむのは至難の業である。これでは「音楽」ではなく「音が苦」になってしまう。だから手話コーラスはろう者には楽しいどころか苦痛になってしまうのではないだろうか。〈D〉」
Dフォーラム（4号、武田弥生、聴） 類型 C	「これは私が手話の学習を始めてからいつも考えていたことなのだが、手話コーラスとか聴こえない子どもたちが無理に発声をして校歌を歌うとか何の意味があるのだろうか？ 視覚的言語である手話を日常的に用い音声言語を必要としない聾者の生活に、健聴者の文化である音楽を強要する必要があるだろうか？ 相手の文化を認めずに一方的に押しつける行為は、かつて日本が第二次世界大戦時に朝鮮に対し、言葉を取り上げて日本語で教育をさせ、名前までも日本名を付けさせたという人権を全く無視した行為と似ているように思う。〈C〉」
プラス『けれども』（6号、中川芳子、不明） 類型 ADH	「演じている人にとっては、自己を解放する喜び、何かを表現する楽しさ、注目をあびる悦楽に満ちた行為なんだろう。それはそれでいいじゃないか。〈H〉けれども、自己満足の為の行為であることを、本人は自覚しなきゃいけないよね。〈A〉ろう者が楽しめるようなものにするには、もっともっとオープンキョウした方がいいと思うよ。〈D〉」と考えることにしました。」
私もその場にいたかったーD子、「ストップ・ザ・ミュージック」を語る（7号、「D子」、ろう） 類型 AC	（ろう者の中にも手話コーラスに参加している人がいるが）「自分が楽しいから」っていう人には会ったことがない。〈A〉」「日本でも、誘われたらはっきり断るとか、不幸にも手話コーラスを見る羽目に陥った時には、席を立ててトイレに行くとか、そういうささやかな抵抗はできるよね。〈C〉」
『ささやかな私のわがまま』（9号、執筆者不明、ろう） 類型 CE	「手話サークルにろう者がいるとしよう。聴者たちはろう者がいるのにそんなことはおかまいなく、聴者同志、手を動かさずに金魚の如くバクバク、ところが手話コーラスと聞いたとたん一生懸命だ。〈E〉 私が言いたいことは、手話コーラスは、大会等とかのろうのいる前ではやめてほしい。やりたい時は、ろう者のいない聴者だけでやるのが常識だろう。〈C〉」

<p>タイムリーな問題提起に拍手—なぜ、ろう者の手話コーラスサークルは解散したか(9号、執筆者不明、ろう者) 類型 EG</p>	<p>「自分たち(ろう者)で、太鼓やランプをつかってリズムを覚え、歌詞の意味、表現を考えながら、一緒に(手話歌を)歌い合い、皆と心をつなげて歌う心をそだてたこと、とても楽しい思い出になっています(G)。ただし、手話講習会や手話サークルが拡がり、なにかと言えば、歌に手話をつけ、それを手話コーラスといい、そばにいるろう者がわかるかどうかを考えずに歌い合っているのを見るようになって、コーラスサークルは解散しました。(E)」「私は、もっともっと、ろう者同志で、自分たちの歌、心の歌を育ててほしいと思うのですが、最近は見せるために歌い、手話で歌うことで自分は立派なことをやっているのだと、自分で自分に陶醉しているような、そんな人達が増えてしまったこと、本当に悲しく思っています。(E)」</p>
<p>言ってもらわないと、聴者にはわからない(9号、林恭子、聴者) 類型 DFH</p>	<p>「手話コーラスとか手話シャンソンは、聴者には楽しいものだから(歌や曲に合わせて体を動かすのは良い気分。美しい声のシャンソンを聞きながら優雅な手、指の動きを見るのもいい気分)、(F) 存在そのものを否定はしないけれど、ろう者にとってはちっともおもしろくないものだってことを、聴者は知る必要があります。(VTRで音なしで手話シャンソンを見たら、ほんとつまらなかった)。(D)」「ただ、ろう者の中に残存聴力がかなりあるとか、手話コーラスを通して聴者とつきあいたいと思っている人がいて、手話の歌が好きなの人がいるなら、その人が楽しむことをやめろという権利は、他のろう者にもないでしょう。(H)」</p>
<p>「手話歌」たのしい?(10号、まつむらたつし、聴者) 類型 BCDGH</p>	<p>「いったい、どれぐらいの聾者が手話歌を楽しめるというのか。中には補聴器などで楽しめる聴覚障害者もいるだろう。だが、「こんなの何がいいの? 手話としてもへんだしちっとも楽しくない!」などと手話している何人かの聾者の人たちが、机に伏せて寝ている聾の人達……そんな人達を現にこの目で見ている。(D)」「手話歌の全てが悪いとは言えないかもしれない。聾者自身の手話の歌詞で、聾者自身のリズムで歌えば、すばらしいだろう(アメリカにはある)。(G)」「だが今回ののは、聴者のメロディーに聴者が翻訳した不自然な手話を合わせたものであった。こういった「手話歌」は手話サークルなどでもよくやっている。手指日本語(日本語対応手話のこと)を学び始めた聴者にとっては手話単語を楽しく覚えられるというメリットはあるだろう。(H)」「聞こえるひとが楽しそうにやっているのに、断ったら悪いから……」とシブシブ聴者に合わせて手を動かしている聾者を何人も知っている。しかし、どう頑張ってみても、聾者の手の動きは聴者に一瞬遅れてしまう。美しくも、楽しくもない。(C)」「音楽は美しい。けれど聴者の文化。手話は美しい。けれど聾者の文化。歌詞どおりに無理矢理手話単語をこじつけた、そんな歌に音楽本来の美しさは感じられないし、そんな手の動きにも手話本来の言語的な美しさは感じられない。(B)」</p>
<p>「手話歌楽しい?」を読んで(10号、竹本勝代、ろう者) 類型 DE</p>	<p>「「手話」というものは音の聞こえない者の為のものです。「手話歌」は健聴の人のものだと私は思います。リズムとか音程の分かる健聴の人達は楽しいでしょうが、どうして私達が楽しむことが出来るのですか? (D) そのところが理解出来なくてどうして手話通訳になれるのですか。(E)」</p>
<p>聴者が出る幕ではない!(10号、岡田篤樹、ろう者) 類型 DG</p>	<p>「でも音楽は聴覚的なもので音声からリズムやメロディーを感じ取れるが、手話表現では感じとることができない。歌詞を手話に変えても、それが不自然になる。つまり手話表現はよくできても、肝心の音楽が聞こえなければ全体の感じをつかむ(理解する)ことができないのだと考えている。(D)」「だから手話歌は視覚的な刺激や歓喜、ドラマを求めるために、ろう者が作って行くべきだと考えている。(G)」</p>
<p>音楽の好きなろう者もいます(10号、肥田才子、ろう者) 類型 G</p>	<p>「去る3月3日本校で行われた卒業式は例年と少し変わっていました。それは、校歌と蛍の光を歌う時、昨年まで音声で歌っていたのを手話で歌うことにしたことです。生徒の多くが歌詞の意味がわからないまま歌っているとわかったからです。練習にあたっては、一つ一つの歌詞の意味を説明し、歌詞の単語をそのまま手話に置き換えるのではなく「意訳」風に、歌詞のリズムも考慮して手話化するなどの工夫もしました。生徒の反応は全体として好評で、歌詞の意味が初めてわかった。手話で歌う校歌は自分の学校の歌だと実感できた、などが寄せられています。(G)」</p>

る。

一方、手話歌に対し肯定的な言説は次の三つに分けられると筆者は考える。

F：現在ある手話歌のテキストの中には美的鑑賞の対象として一定の価値を持つものがある。

G：工夫することで手話歌のテキストはろう者にも楽しめるものになる。

H：やっている人たちが楽しいならば、それはそれで良いのではないか。

これらの類型を見ると解るように、手話歌に肯定的な主張のうち二つ、すなわち類型 F と G はテキスト面での美的価値にのみ言及するものであり、また類型 H は彼我のコミュニケーションを断念するという形式を取っている。別の言い方をすれば、これら三つの類型は、手話歌をろう者社会全てに関わる問題として取り扱うのではなく、純粋にテキストの問題として、あるいは特異な社会集団内の実践として位置づけ、ろう者社会から隔離することで肯定的評価を可能にしているのである。

対照的に、手話歌に否定的な主張のうちテキスト面を問題としたものは一つだけであり、残る四つはいずれも手話歌の社会的な側面を問題視する形式を取っている。類型 A、C、E は手話歌の実践の場におけるろう者と聴者のディスコミュニケーションに直接言及しており、また類型 B はろう者社会の文化への聴者の無理解あるいは誤解を指摘していると言える。以上から、1990年代前半から半ばにかけて、日本のろう者社会で手話歌が問題視された時、その問題の殆どは、ろう者と聴者のコミュニケーションの不全に関わるものであったということがわかる。

さらに個々の記事における主張類型の出現の組み合わせを見てみると、表2に示した14件の記事の中で手話歌に肯定的な類型のみが見られるのはわずか2件であり、残る12件は否定的な類型

のみ、あるいは否定的な類型と肯定的な類型の混在という形を取っている。また、これら12件の中でも純粋に手話歌のテキスト面のみを問題視したNo.10の岡田篤樹による記事「聴者が出る幕ではない！」(類型DおよびGを含む)を除く11件は、必ず類型ABCEの何れかを含んでいる。つまり、表2の14件の記事中11件において、手話歌がろう者と聴者のディスコミュニケーションの場になっているという認識が存在しているのだ。すなわち、ろう者に於いては「何故、聴者は我々のことを理解しないのか」「何故、聴者は我々のことを理解しようとししないのか」という苛立ち、聴者においては「何故、我々はろう者を理解できなかったのか」という悔恨の情が、手話歌に関わる言説に類出していたのである。

もちろんこれらの記事の選択に際し、前節で見たような木村の言説戦略が影響を与えた可能性は排除出来ないが、それでもなお、この時期の日本のろう者社会とその周辺に、手話歌をろう者と聴者のディスコミュニケーションの場と見る言説が一定量存在したことは疑い無い。

次に、手話歌のテキストそのものへのまなざしのありようを検討してみよう。表3に示したのは、表2で紹介した「D」紙上の手話歌言説における主張の諸類型の出現状況を、ろう者による主張か聴者による主張かという観点で整理したものである。このうち手話歌のテキストに関連する主張類型はD、F、Gの三つである。

手話歌のテキストに対する否定的な主張類型である、主張類型D「手話歌のテキストはろう者

表3：「D」紙上の手話歌関連諸記事における主張の類型

	A	B	C	D	E	F	G	H
ろう者	3	1	3	2	3	1	3	0
聴者	0	1	2	3	0	2	2	2
不明	1	0	0	1	0	0	0	1

にはわからないものだ」が出現しているのはろう者2件（竹本勝代、岡田篤樹）、聴者3件（野呂和子、林恭子、まつむらたつし）聞こえの状態が不明な者1件（中川芳子）の合計6件である。このうち、ろう者による主張2件の内容を見ると、竹本は手話歌が本質的にろう者には理解出来ないものだとしているのに対し、岡田はろう者にわかる手話歌はろう者によって創られるとしている。一方、聴者においては、竹本同様に手話歌とろう者が本質的に相容れないものであるとの主張（野呂）、聞こえの程度によってはろう者は手話歌を楽しみうるのかもしれないとの主張（林）、ろう者が創作した手話歌ならば問題無いとの主張（まつむら）がある。

次に手話歌のテキストに対する肯定的な主張類型である主張類型FおよびGに注目してみよう。主張類型F「現在ある手話歌のテキストの中には美的鑑賞の対象として一定の価値を持つものがある」が登場したのはろう者1件（木村晴美）、聴者2件（池口美穂、林恭子）であるが、この3人の書いた文言はいずれも手話歌のテキストの視覚的な美しさを評価したものであり、手話歌のテキストの文法面については考慮していない。これは、喩えて言うならば「書道の名人が文法的には破綻している文章を使って制作した作品」の見映えが賞賛されているようなものである。

一方、主張類型G「工夫することで手話歌のテキストはろう者にも楽しめるものになる」が登場したのはろう者3件（執筆者不明、岡田篤樹、肥田才子）、聴者2件（池口美穂、まつむらたつし）であるが、このうち岡田以外の4件は全て、文法的にろう者に理解出来る手話歌の重要性を指摘している。

すなわち、1990年代前半の日本における手話歌のテキストについての議論は、以下のように整理出来る。まず、手話歌という表現形式そのものがろう者と相容れるか否かという論点があり、これについては「手話歌はろう者と本質的に相容れない」という意見と「ろう者の手による手話歌は

ろう者が楽しめるものである」という意見がろう者側にも聴者側にも共に存在していた。次に既存の手話歌のテキストについては、文法面は無視すれば視覚的に美しいものはあるという意見があり、また、手話歌のテキストが文法的にも破綻していないことの重要性を指摘する意見も少なくなかったと言える。

6：まとめ

ここまでの検討によって明らかになったのは、以下の5点である。

- ・ 1990年代の日本のろう者社会及びその周辺には、手話歌はろう者と聴者のディスコミュニケーションの場であるという認識が一定の規模で成立していた。
- ・ 木村晴美もこうした認識を共有するろう者の一人であり、更にはこのような状況に、聴者によるろう者の無意識の抑圧の構造をも見出していた。
- ・ 木村は自らの発行するミニコミ紙「D」の紙面において手話歌を批判する言説を集中的に紹介することで、手話歌を巡るディスコミュニケーションの問題と、聴者によるろう者の無意識の抑圧の問題の存在を明るみに出そうと試みた。
- ・ 手話歌とろう者が本質的に相容れないとする意見もあったが、それはろう者の側においても必ずしも多数派とは言えない規模のものであった。
- ・ 手話歌のテキストについては、その視覚的な美しさを認める意見と、文法面への配慮の重要性を指摘する意見があった。

7：結論

本論文で示したように、1990年代前半の日本のろう者社会における手話歌への眼差しには批判

的なものも少なくなかったが、それらの批判の大半は手話歌という芸能の形式そのものではなく、この芸能を実践する社会集団のありようや、この芸能が実践される際のコミュニケーションのありように向けられていた。これは、逆に言えば、手話歌という芸能の形式そのものが本質的にろう者と相容れないと考えられていたわけではないということでもある。少なくとも、本論文で見た1990年代前半の日本における手話歌論争においては、そのような主張は殆ど見いだされなかった。実際、芸能としての手話歌は、拙論（加藤2006）で概観したように1990年代後半からテキスト面でも実践主体のありようの面でも大きく変化し、現在では数多くのろう者が自らの芸術表現の形式として手話歌を積極的に選び取っているのである。

ただ、ろう者によるこれら新しい手話歌の試みは、当然ながら実践主体がろう者であるということによってディスコミュニケーションや聴者による抑圧の問題を回避しているし、「ひよこっち」「きいろぐみ」「手話ダンスの仲間たち」等のようにろう者と聴者の何れもが参加している実践主体においても、活動の場において使用される言語を手話に統一することで、ディスコミュニケーションや抑圧の問題を同様に回避している（手話は片言レベルである筆者の方が、彼らの活動の場では疎外感を感じる程である）。また彼らはテキスト面でも、手話歌詞の創作をろう者やCODAが担当することで、むしろ、ろう者こそが十全に享受出来るような手話歌を生みだしているのである。

こうした現状を踏まえた上で、「D」紙上における手話歌言説から我々は二つの結論を導き出すことが出来る。すなわち「手話歌という芸能の形式は、本質的にろう者と相容れないものではない」というものと、「もしもろう者ではない人間が手話歌という実践に関わろうと考えるのであれば、その人物はまずろう者集団とのコミュニケーションを可能な限り深めるべきである」というものである。

もちろん、日本国の法律は手話歌の実践者にろ

う者との深い関わりを強制するものではない。だが、ろう者が手話に対し抱いている各種の強い感情の存在を考慮するならば、手話歌の実践者は手話とそれを生みだしたろう者たちに対して格別の敬意を払うことが、ルールというよりはむしろ無用な軋轢を生み出さないという意味でのマナーの観点から望ましいと筆者は考える。

8：付記

なお、木村・市田らが翻訳した「TBCニュース」「サイレント・ニュース」の両紙の当該号は、筆者が調査した限りにおいては日本国内の公的機関には所蔵されていないようである。聴覚障害者の為の大学として知られるアメリカ合衆国ワシントン・コロンビア特別区のギャローデット大学の図書館には当該の文献の所在が確認されたので複写を希望する旨を伝えたが、残念ながら先方の協力を得ることは出来なかった。よって木村らが「D」を発行していた時期の両紙の紙面の分析については、今後の課題としたい。

「D」紙そのものも現在では入手・閲覧の困難な号が多いが、快く資料をお貸しいただいた桜井強氏に心よりの感謝を捧げる。

注

- 1) 15号末尾には次号をもって休刊との記述があるが、16号の存在は未確認である。
- 2) 森壮也によると、木村とともに市田泰弘もこの新聞の発行に深く関わっていたとされる。森壮也、2000「ポストコロニアルのろう文化——サバルタンはどこにいるのか」<http://www.arsvi.com/2000/0410ms.htm>、2007年10月5日閲覧
- 3) D PRO、1999「D PRO 活動の歩み」（http://www.d-pro.net/dpro_site/dpro-guidance2005/activity2005.html、2008、12、7）
- 4) この論文を巡って巻き起こった大論争を受け、青土社は翌年4月に『現代思想』臨時増刊号「ろう文化」を出版している。

- 5) Nakamura は発足当時の D プロの特徴として「全日本ろうあ連盟と D プロの両方において活発に活動している者は極めて少ないこと」「40 歳以下の者が大半であること」を指摘している。またその活動は「アメリカ型のアイデンティティ・ポリティクスを日本に紹介することを目指した、分離主義的なろう者運動」であったとしている (Nakamura 2006: 158-159)。
- 6) 誤解を避ける為に附記しておく、朝倉は阪本や「日本ろう者手話ダンスグループのぞみ」の活動を応援する立場を採り続けており、「Deaf Unit」が活動を終了した際にはわざわざ阪本に会ってその労をねぎらっている (2004 年 10 月 15 日、朝倉の事務所における筆者の聞き取り調査による)。また「きいろぐみ」から独立して「ひよこっち」を創設した橋本一郎は、朝倉の活動が 1990 年代後半から 2000 年代の日本における手話歌の発展の基礎を築いたと指摘している (2004 年 8 月 23 日、新宿における筆者の聞き取り調査による)。

参考文献

- D 編集室編, 1991-1996, 『D』, No.1-15, 木村晴美・D プロ
- 加藤晃生, 2006, 「東京都における手話 = 音楽複合体の諸実践に見るテキストの多様性」『音楽学』51 卷 3 号: 175-186.
- MJ ビエヌヴニユ・木村晴美, 2000 「挑戦するろう者」『ろう文化』, 青土社
- Nakamura, Karen, 2006, *Deaf in Japan: Signing and the politics of identity*, New York: Cornell University Press